

メディアオロジー：その周辺領域

index

--直接的周辺

1. ブーニューのコミュニケーション論
2. スティグレールの技術哲学
3. ラトゥールの「科学の人類学」
4. ペリオアの「利用法の論理」

--関連領域

5. 技術を観る眼--シモンドンの場合
6. 技術を観る眼--ルロワ=ゲーランの場合
7. チャコチンのプロパガンダ論
8. デリダ - スティグレールによる技術をめぐる対話
9. ダゴニエのマチエール論
10. ジラルルの後継者たち

1. ブーニューのコミュニケーション論

有名なシャノン(Shanon)の情報理論(1948)は、彼がベル電話会社の社員だったことと無縁ではない、とドゥブレーは言う(「メディアオロジー宣言」p.59)。送信/受信という直線的なモデルは、メディアオロジーが扱うような、メッセージが行動を組織する過程には適用できず、そのような場では情報も商品、あるいは加工可能な素材なのであり、単なる刺激でもなければ、それ自体として存在するものでもない(同pp.60-61)。情報の伝達(トランスミッション)とは組織すること、組織するとは階級化することなのである(同p.64)。

一方、ドゥブレーとともにメディアオロジーの機関誌「Les Cahiers de mediologie」に関わる **ダニエル・ブーニュー(Daniel Bougnoux)** のコミュニケーション論は、ある意味でこれを補完する。ブーニューは精神分析、文学系の著作

もあり、1976年には雑誌「Silex」を創設している。現在はグルノーブルのスタンダール大学情報コミュニケーション学科の教授である。

ブーニューによれば、情報はメッセージの持つ不確定要素の削減として定義でき、一方のコミュニケーションは、より幅広い接触を求めることであり、実際にそれが担う情報は乏しいことから、情報とコミュニケーションは対立する関係にある(「コミュニケーション対情報」(La communication contre l'information、Hachette、1995)p.18)。「コミュニケーションするとはオーケストラに入ること」(ベイトソン)なのであり(同、p.37)、人は常に「関係(社会的)」を結ばないわけにはいかず、人はまずもって「関係」を生きる(同、p.51)。それを担うのは、言語で言えば交話機能(phatique：話しかけ接触を保とうとする機能)であったり、詩的・遂行的発話であったり(メタ言語機能)する。また、より身体的な接触であったりもする。

あらゆる発話は集団の中に向けて発せられ、その中で規定される。ここには、**ピエール・ブルデュー(Pierre Bourdieu)**が「Ce que parler veut dire」(Fayard、1982)(「話すということ」稲賀繁美訳、藤原書店)で展開する言語学批判にも通ずるものがある。フランス語の「私は存在する」(Je suis)は、「私は従う」(Je suis)に通じるのである(同、p.55)。

コミュニケーションは、フロイトの言う快樂原則に基づいている、とブーニューは分析する。現代のマスメディアは、情報よりもコミュニケーションに重きを置き、その即時性、身体性を通じて、人間をいわば幼児化する(同pp.51-52)。これはメディアオロジーと集団心性とを結ぼうという視点であり(同、p137)、ドゥブレーとはまた違った探求の道が開かれているのかもしれない。

2. スティグレールの技術哲学

ベルナル・スティグレール(Bernard Stiegler)は、97年現在、コンピエーニュ技術大学のCOSTECH研究ユニットの所長を務める。新進気鋭の哲学者として、「La Technique et le temps (技術と時間)」(I巻、1994、II巻、1996)を著すなど、従来正面から扱われてこなかった技術の問題について哲学的立場からの理論的探求を続けている。一方で、96年にはエアバス社の電子文献システム的设计にも協力するなど、势力的に技術の現場とも関わっている。メディアオロジー関係誌「Les cahiers de mediologie」にも参加、理論派として鋭い論考を寄せているようだ。

「La technique et le temps」第I巻

同書は副題が「La faute d'Epimethee(エピメテウスの過ち)」となっている。この内容をごく大まかに紹介しよう。

哲学は、一部の例外を除き、技術を正面から見据えることがほとんどなかった。ロゴスを道具とみなすソフィストを非難する立場から、哲学はテクネとエピステーメを分離し、技術を一段低いものと見なしてきた(p.15)。しかし、技術の発展が社会の脅威にすらなっている現代において、技術の発展を予見し方向付けを行うことが可能か、という問題が提起されている。それはとりもなおさず、技術と時間の問題の検証を促しているというわけだ。

スティグレールはまず、**ジル(Bertrand Gille)**の「Histoire des techniques(技術史)」(Gallimard 1996/78、共著)と**シモンドン(Gilbert Simondon)**の「Du mode d'existence des objets techniques(技術的对象の存在形態)」(Aubier, 1958/69/89)を取り上げ、システム(体系)としての技術の進歩を見るマルクスの立場に立脚した議論を示す。有機物(生物学的対象)と無機物(物理・化学の対象)の狭間に「組織化された無機物(inorganique organisee)」があり、創造性(inventivite)は技術的对象の中にあるのであり、人間はその「オペレータ」に過ぎない(p.89)という視点は、人間中心主義的な見方を転回させようとするものだ。

だが、シモンドンは、技術的对象が持つ潜在性を発現させるには人間による「予見、先取り」(anticipation)が必要だと述べる。スティグレールはこれを人間中心主義から脱していないものとして批判する。では人間中心主義はどこから来るのか、という問題から、次にスティグレールは人類学的な視点を取り上げる。人類学の先駆としてまず取り上げられるのは18世紀の**ルソー(Jean-Jacques Rousseau)**の「人間不平等起源」だ。ルソーの議論は、自然への対立物として人間があるというものだが、その分離の起源として「最初の人間」を想定する。姿形は我々とたいして変わらないが、まだ文化を持たない最初の人間というフィクションは、もちろんその後の人類学によって否定される。

その代表として**ルロワ-グーラン(Andre Leroi-Gourhan)**の「Le Geste et la Parole」(Albin Michel, 1964)(邦訳「言葉と身ぶり」荒木亨訳、新潮社、1974)が挙げられる。ルロワ-グーランは先史時代における頭蓋骨と二足歩行(手の解放)の発達をもとに、人間と技術が同時に成立したと論じ、人間中心的でない時間の捉え方を示した。つまり、例えば石を割って道具とすることには、すでにシーケンシャルな行為の連鎖を「予見」しているということだ。技術的意識にはこうした「先取り」がなくてはならないのである。ところが民族ということまでを考えると、ルロワ-グーランは、神経生理学的に規定された動物学的起源から人間が解放される時を人間の起源と捉え、はからずもルソーに接近してしまう。この点をスティグレールは批判する(p.171-172)。ルロワ-グーランは、道具を作ることと道具が進

化することの二つの「先取り」を想定し、ここから技術的知性とそうでない知性があると考えた。だが、両者は表裏一体ではないか、とスティグレースは言う(p.163)。動物学的なものから社会民族的なものへの技術による転化を、**デリダ(Jacques Derrida)** 的な差延(differance)として捉え、道具が皮質に後成的に影響するという概念「epiphylogenese」(後成統系発生)を示す(pp.183-184)。

次にスティグレースは、**プロメテウス/エピメテウス神話**を取り上げる。中心になるのは「プロタゴラス」の320D(プラトン、岩波文庫、pp41-44)である。うっかり者のエピメテウスが人間に何も与えなかったために、プロメテウスは火(技術)を盗んで与え、死の刻印としての苦しみを受けるというくだりだ。この二重の罪を基に、スティグレースは**ハイデガー**の実存哲学を批判的に読み解いていく。この読みは微細を極めていくが、中心的な部分だけを簡単にまとめてみよう。ハイデガーの「存在と時間」は、「世界内存在」としての日常性から脱し、真の存在(過去にあり、そして今だにないもの)へと向かうことを説いているわけだが、スティグレースの視点は、存在の時間性は補綴性(protheticite)によって構成されるのではないか(pp.249-250)、というものだ。これは上の神話における技術のありように呼応する。補綴(prothese)とは外延性/企図(p.240)であり、それは「先取り」と密接に関係し、存在の「過去/未来」からもたらされるとされる時間性は、補綴によって構成されると見る(protheseとはpro-these、つまり先にあるもの(p.241))。スティグレースの中心課題は、実存的・時間的分析を技術の視点から脱構築し、人間中心主義から解放することにあると見られる(p.267)。

メディアオロジーに継る視点としては、知識の伝達のためには、技術的形式による知識の記録が必要だと説いている(p.217)部分だろう。そしてこの記録が時間について持つ問題が、97年に刊行されたII巻で大きく取り上げられるようである。

「La technique et le temps」第II巻 (Gallimard, 1996.)

「Desorientation(方向喪失)」との副題が付いた本書は、前著を踏まえた上で、記憶技術の産業化と時間の問題を検討している。

スティグレースはまず、記録する技術の正書性(記録される対象と記録物との関係)について考察する。最初の考察対象は写真で、ロラン・バルト(Roland Barthes)の**"La chambre claire"**(Gallimard, 1980)(邦訳「明るい部屋」、花輪光訳、みすず書房)を引きながら、写真においては、過去にあったものが、たとえそれが観賞者自身の過去ではないにせよ、かつての「いま現在」として復帰すると述べる(p.27)。写真は視覚的時計(時間の意識をあらしめるという意味で)なのである。同時にそれは、遅れてくる鏡でもある。バルトは写真に、文化や知識に属する要素ストゥディウム(studium)と、予測不可能で不確定な破壊的要素プンクトゥム(punctum)を区別するが、このプンクトゥムは記述できない要素であり、記述に

とって無限の遅延をもたらす(p.31)。それは不在(かつてあったが、いまはないということ)に対する喪として、差延(differance)として機能する。フェリーニの映画「インテルビスタ」で、自分たちがかつて出演した「甘い生活」を観るマストロヤンニとエクバークは、役者本人らの過去と、作品としての過去を観る。ひるがえって観客もまた作品としての過去と、自分の過去を想起する。こうして写真や映画は、観る者にとっての遅れてくる鏡として機能する。

「かつてあったもの」を示すこの鏡は、観る者にとっての「いまだないもの」(未成熟・未完成)であり、それゆえに差延をもたらし、「いまだないもの」に向けた整形と、そのための補綴性(すなわち技術の作用)が問題になる。スティグレールはこれを正綴性(orthothese)と呼ぶ。そして、それを考えるために文字の問題を取り上げる。ジャン・ボッテロ(Jean Bottero)の"La Mesopotamie"という著作に従い、メソポタミア文明の絵文字板の読解が難しいのは、文字のコードだけでなく、コンテキスト(絵文字が書かれる状況、使用目的など)をも知らなければならないからだ、と述べる。自分が経験したのではない「すでにあるもの」に接近できるためには、文字は脱コンテキスト化されていなくてはならず、それはアルファベットに至りようやく獲得される。だが、読むことが再コンテキスト化の働きであることから、そこには不透明性が増すというパラドクスがある。脱コンテキスト化の完成は、テキスト性の作用それ自体を意味するが、それは「来るべき」テキストであり、いまだないものなのだ。テキスト性とは遅延であり、正綴性とは差延的同一性(p.72)なのである。

記録性は生物としての種にはないものだ。I巻で示されたように、外在化によってこそ人間の継承は可能になる。では、民族的な差異はどこからくるのか。それはリズム性である、とスティグレールは言う。民族的な伝統の選択は、反復による差延の結果であり、反復はすでにあるプログラム(先に書かれたもの：例えば種であれば、遺伝子を考えてみればよい)を止揚する(p.94)過程にほかならない。記憶保持の有限性(finitude retentionnelle)によって、外在化(外延化)としてのquoi(モノ)が構成されるが、それは同時にリズム性という不確定性を秘めており、反復によって民族に特有のテリトリーに規定された美的観念、スタイル、時間や空間、速度が止揚されていく。ここから、現代的な(近代的な)産業化が何をもたらすのかという新たな疑問が生ずる。

すでにあるプログラムとは、身体とquoi(モノ)のダイナミズムがいわば統合されたものであり(I巻に即して言えば、後成系統発生的)、そこから生成される時間性や空間性は特定のテリトリーに属する。しかしそれは、記憶が産業化される(情報産業化)ことで再び止揚され、新たな「すでにあるもの」が組織化される。アナログ複製技術、デジタル技術、生物学的技術などが、速度を特徴とする支持体をもたらし、それにより脱テリトリー化がもたらされる。例えば、リアルタイム性はコンテキストの消失を導き、エンコードやデコードといった読む行為に内在していた作用が機

械に委ねられていく。情報は不均質に分配され、持つ者が力を有する。政治の経済化である。

記憶の外在化がそもそも根源的なものであり、その根底にプログラムがあるのなら、それを形づくるのは何だろうか。この問題に、スティグレールはフッサール現象学の批判という形で行き届こうとする。プログラムもまた時間的对象(objet temporel)であり、同時に現象学的分析を越えることを課している、とスティグレールは述べている(p.215)。フッサールの言う知覚の一次過程、二次過程といった区別を、補綴性のもつ外延化から脱構築しようとするこの試みについては、日を改めて詳しく検討しよう。

いずれにしても本書におけるスティグレールの議論の主軸は、記憶における技術(外延性)が実は根源的なものだとする視点から、現代の情報産業までも捉えようとする点にある。現代の科学技術に対する分析についてはややもの足りない気もするが、皮相的でない分析を行おうとすれば、こうした根源的なものを考える視点はますます重要になっていくと思われる。

3. ラトゥールの「科学の人類学」

ブリュノ・ラトゥール(初期の英語での著作のためかブルーノと表記されることが多いようだ)は現在、パリ鉱山大学校(Ecole des mines)の革新社会学研究所(CSI : Centre de la sociologie de l'innovation)に所属している。「カイエ・ド・メディオロジー」に参加するとともに、社会学的アプローチによって科学の現場を対象とした著作が数多く出版されているが、ここではそのうちの2冊を取り上げて、その視座について簡単な覚え書きを記しておこう。

「La Science en action」

Gallimard Folio, 1989, 1995.

「活動する科学」と題されたこの著作からは、ラトゥールの立つ場所が鮮明にうかがい知れる。科学的事象には、すでに既得、周知の事実となったものと、対立関係、論争にある渦中の事項とがある。表題の活動する科学とは後者を指す。後者から前者に至るまでの過程を、ラトゥールは詳細に追っていく。科学研究の場で発せられた言説は、すぐに他者の手によって絡めとられてしまう。その言説の命運は他者が握っているのである。ある言表が事実として承認されるかどうか、すべて他の科学者次第であるからには、その言表はそうした想定のもとで、いかに効率よく発せられるか、いかに敵対する側をかいくぐり既成事実化できるかといった、いわば生き残りの戦略の中で発せられなければならないのだ。

まずは論文の書き方が問題になる。それは引用で自己武装しなければならない。直線的な散文ではなく、防御線を連続的に、畳みかけるように配置する。それこそが科学論文の証なのだ(pp.119-120)。必然的にそれは一般読者にはなじみにくいものとなる。また、次に敵側を粉砕し自己防衛するには研究施設も必要であり、同時に仲間や後ろ盾も必要となる。それは極めて政治的な世界だ。最初に発せられた言表は他者の手にわたり、さまざまな変形を加えられて普及していく(p.251)。同時に反論は徐々に困難になっていくのだ。

このように科学の領域の政治性を、きわめて多彩な例を引きながら、ラトゥールはあぶり出していく。ある意味でそれは身も蓋もない論証にも思える。また、アングロサクソンのやや図式的にすぎる分析が多少気にならないでもない。『現代思想』98年7月号および8月号で紹介されている論文「サイエンス・ウォーズ」(金森修)では、ラトゥールのそうした分析がアメリカの科学者たちから大きな反感をもって迎えられたことが紹介されている。だが、政治性という視点から科学というものに対する批判を加え、とりわけそれが閉じた世界であることをつづさに検証していく様は、一般人から見ればある種の小気味よさすら与えてくれる。ねがわくば少しでも、それが開かれたものになっていくことを夢想させながら…。

「Nous n'avons jamais ete modernes」

La Decouverte, 1997.

だがラトゥールは科学の現場を批判するにとどまらない。上の立場を継承しつつ近代性という概念にまで批判を向けていく。それが本書の核を成している。オゾンホールの問題など、今や科学技術だけでも、政治だけでも解決しえない様々な問いが突きつけられている。そうした問題の本質は科学と政治とがいきりまじったハイブリッド(混成体)なのだ。ラトゥールは見る。近代としてくくられている時代は、実はハイブリッドがひたすら産出されてきたのだが、「近代」という概念装置によってそれらは覆いかくされてきた。これが大まかにいってタイトルの『われわれは一度もモダンではなかった』ということの意味である。この構図を検証し直し、あらたな可能性を開こうという野心的な論考が本書である。

ハイブリッドを生み出す一方で、科学技術と政治、自然と文化とを分離しようとする「近代性」というあり方(行為)は、すでに17世紀のイギリスにおいて、思想家ホブスと科学者ボイルとの論争に現れている。ホブスは社会契約という形で主体がすべてを統治すると考えるのに対し、ボイルは自然の事物はそれ固有の法則をもっていることを明らかにする。だが、実は両者の立脚点はすでにしてハイブリッドでしかない。ボイルが依って立つ自然は研究室の中で人為的に構築されたものであり、またホブスの立場は科学の名のもとに社会秩序が乱れることを排しようというものである。科学と社会の混成体は、こうした議論をもとに分割され棲み分け

されていく。

自然と社会の両極を分離する(超越論的に)ことによって、生み出される混成体そのものは見えなくなってしまう。実際には混成体に取り巻かれていても(よってわれわれはモダンではない)、それらは放逐されてしまうのだ。カントからポストモダンに至るまで、哲学のある種の伝統は、そうした両極の分離にあってもなお、その全体性を捉えようとしてきた。だがそうした試みはことごとく失敗に終わってきた、とラトゥールは言う。こうした全体性を真に捉えうる視点は、必然的に人類学的な視点とならざるを得ないのだ。だが人類学そのものも、近代の側から近代でないものを見ようとするため、自然の側、あるいは文化の側に偏った、非対称的な視座でしかない。これをずらし、対称的な人類学を構築することによって、混成体に対して適性な視座が得られるのではないか。これが本書の要となる。それはとりもなおさず、われわれが最初からそうであったもの、すなわちモダンではないことへと回帰することにほかならない。自然、社会の二極分離に対して等距離の視座を設定し、そこから混成体を捉えること。混成体が織り成す網状のつながりを認識すること。それをラトゥールは理論体系として導こうとしている。

だが、こうした視座はやや図式的、あるいは静的にすぎるのではないかということもできるのではないだろうか。自然と社会の二極分離は、確かに「近代」の一断面ではあるだろう。だが、それを批判的に新しい視座のための根本的な図式として据えるには、そうした分離が生成されてきた経緯を多面的に捉えなくてはならないのではないだろうか。それを経てはじめて、批判的視座にも説得力が生まれるというものだ。確かにラトゥールの議論の枠内では、両極を総合的に捉えようというメタレベル、あるいは新しい知性のあり方を示唆してはいるだろう。だが、そこに至るには、まず分離の生成過程を詳しく検討しなければならない。「近代」というものの再検討は今、さまざまな形で進められており、そろそろ理論的に裏打ちする必要も出てきてはいるだろうが、性急な理論化では意味をなさない。科学の政治性を暴くラトゥールの視座が、果たして近代という大きな問題への批評たりえているのかどうか、これまでに刊行されているその他のラトゥールの著作や、今後の議論展開などに注目しつつ、考察していく必要があるだろう。

(Text: 98年8月)

ラトゥールに関する資料としては、「現代思想」誌96年5月号(特集：科学者とは何か)所収の論文、金森修「科学の人類学 - ブルーノ・ラトゥール試論」がある。上でも触れたラトゥールの『La Science en action』の邦訳が出版された模様。川崎勝、高田紀代志訳『科学が作られているとき - 人類学的考察』(産業図書)。

(Text:99年4月)

4. ペリオアの「利用法の論理」

ジャック・ペリオア(**Jacques Perriault**)は視聴覚分野を専門とする社会学者で、現在はパリ第10大学の情報コミュニケーション学部教授である。89年に刊行された代表作『利用法の論理』("**La Logique de l'usage**", Flammarion)は、ドゥブレのメディアロジーにも一部影響を与えている。例えば、新興のメディアが最初は先行するメディアを模倣・追従するという「駅馬車効果」(最初の鉄道がレールの上を走る駅馬車のようなこと)や、一度発展したメディアはそれ以前のメディアには戻れないという「ラチェット効果」などの概念は、ペリオアの議論に由来しているのだ。上記の代表作は、主に視聴覚のメディアについて、その利用法という面から興味深い議論を展開している。その内容をかいつまんで見ておこう。

発明の長い系譜

周知のように、それぞれの発明には発明者の名が付される。だがそれに至る系譜には忘れ去られた名が数多く存在するのもまた事実である。フォノグラフの場合、エジソンの蔭で、音の記録をもたらしたシャルル・クロ(**Charles Cros: 1842-88**)は忘れ去られている。音響装置自体のアイデアはラブレーやシラノ・ド・ベルジュラックにまで遡ることができ、そこからクロを経て、光学電信(1844)の実用化、さらにはシャルル・ブルスール(Charles Bourseul(1829-1912)が原理化した電話へと至る。写真や映画に代表される視覚機器の場合も、「カメラ・オブスキュラ」は古代中国にすでに見られ、デカルトはそれがもたらすイメージの寸法と距離の關係に言及し(p.30)、キルヒャー(**Athanasius Kircher: 1601-80**)の幻灯機を経て、写真の発明、そしてマイブリッジ(**Muybridge:1830-1904**)やマーレー(**Etienne Jules Marey:1830-1904**)などの連続写真、レノー(**Emile Reynaud:1844-1918**)の光学劇場(アニメーションの先駆)などへと繋がっていく。1927年にはスコットランド人ベアード(**Baird:1888-1946**)により画像信号をレコード盤に記録する試みもなされている。情報工学についても、パスカルやライプニッツよりも古い、レイモン・リュール(**Raymond Lulle:1232-1316**)にまで遡ることも可能である(p.51)。このように、いずれの発明についても長い系譜を辿ることができる。視覚と聴覚の発明の系譜は密接に繋がっており、キルヒャーが音響機器の理論を書いているほか、クロもカラー写真の開発を行っており(p.45)。電話による画像の転送の試みは1878年にはすでに行われている。

発明の論理から利用法の論理へ

いずれの機器も、あらかじめ想定された結果を得るために発明されたものであることがわかる(p.56)。それは遠隔で会話したり映像を目にしたりすることだ。そのためには、既存の技術や知的な手段、利用可能な素材などがつぎこまれる。そしてそ

こうした通信機器(コミュニケーションのための機器)が生まれる背景には、現存する不均衡の是正しようという発明者の努力がある(p.58)。それは個人が置かれた隔絶状況だったり、不在であったり、あるいは身体上の障害であったりする。こうした機器は、シミュレーション、対話、経済活動、組織化、制御といった機能を担いつつ(p.61)、発明者の元を離れていく。

では利用者は新しい機器に対してどのような振るまいを見せるのか。ペリオーはここで、技術者がメシア的なものとして捉えられ、利用者はその機器が担う神話を信奉するのだと述べている(p.72)。通信機器は、空間と時間の壁を超越することを担うものとしてそれ自体が一つの神話と化し、利用者の想像の世界において飛躍として受け止められる。「宗教と技術性とは、存続する呪術的思考の骨組みにおいて結びついている」(p.75)のであり、そこから機器についての言及と具体的な行使のゆらぎが生じるのだとされる。

発明された技術の周りには、様々な人々が集い(かくして技術は普及する)、それらによって機器の利用法について様々な提案がなされる。だが、そこから技術の利用法は逸脱していくのだ。用者の側は技術者が想定していたのとは別の利用法をもたらすのである。ペリオーは様々な例を挙げている。電信機はかつて、家屋の管理者あるいは墓地での連絡装置としての利用まで唱えられていた。70年代にはビデオ製作が反権力の運動に結びつけられることもあり、また教育現場でのビデオ利用も唱われた。子どもによる写真撮影の試みは模倣により波及していく。コンピュータは、特に女子生徒の間で擬人的に受け入れられる報告もある。歴史的に見ても、かつての幻灯機は、娯楽だけでなく教育目的に利用されたことがあった(ルイ15世の家庭教師ノレ司祭、ヴォルテールによる上映会など)。補聴器として考案されたベルの電話も異なる命運を辿っていく(オペラの中継など)。…etc。発明者(製造者)の周りで、今度は利用者の側が、みずからの不均衡是正のためにシミュラクルを産出、保存、流布していくのだ(p.82)。かくして製造者の論理と利用者の論理との間には溝がうがたれていく。

技術性、宗教性

隔絶され、人間的な接触と、かつて市場を歩けば得られたような情報が剥奪された人間は、そんな中で、通信機器は同好の志を集めていく(無線の愛好家、フロッピーをやりとりするコンピュータの愛好家など)(p.197)。空間的、時間的な不均衡の是正という神話を、利用者の側はみずから取り込んでいくのだ。

同好の志が集まる場合、その想像的な充当の対象である機器は、それ自体がいわば「崇拜されて」いる。この場合は機器が集団をつなぎ止める「聖なるもの」となっている。だが、例えば家族の団らんにおけるラジオやテレビは、それ自体が崇拜されるわけではない。この崇拜対象の推移はどう考えればよいだろうか。機器には、

それが本来担う機能以上に、象徴的役割が与えられる(p.211)。ペリオーは日常生活での光学機器にまつわる儀礼化(赤ん坊の写真を定期的にとること)や権力指向(ステータスシンボルとしての視聴覚機器)を示唆している。「利用者は、おのれの企図、その深い欲望、そして自らが考える利用のモデルが複合的に交錯する結び目に位置する。それらすべてを担いつつ、論理を行使するのである」(p.213)。伝播するにつれて、機器に付される象徴的なものも多様化する。と同時に、その機器自体の神話性は薄らいでいくのではないか。いわばそれは、一種のエントロピーなのだろうか。

以上がごく大まかな同書の内容だ。広義のメディウムである機器は、それ自体が進歩という神話、理念を纏っている。それは科学への信奉でもあるだろう。ペリオーがいうように「宗教と技術性」は深い部分で繋がっているのであり、技術は「心的」とされるものと不可分なのではないか。ペリオーは技術革新が不均衡の是正のために産まれるというが、それを、技術を道具とみる視点だと捉えてはならないだろう。むしろ不均衡とは根源的なものであり、技術革新が周辺を螺旋状にめぐっていくその中心的なものだろう。その意味で、技術はむしろ根源的なものだといえるだろう。だが一方で、不均衡自体を単系のモデルで図式化してはならないだろう。というのも、そうした単系のモデルでは、機器自体が担う神話の信奉から、そこに充当される別の象徴への移行も、製造者と利用者との間に産まれる論理の差異も、捉えられなくなってしまうからだ。想像的なものと不可分の人間集団の組織化については、われわれは多くの議論、検討を行っていかなければならないだろう。それこそまさに、メディアロジーの一つの極をなす問題だ。

5. 技術を見る眼 - シモンドンの場合

技術を哲学の問題として取り込むこと。近年フランスにおいてそうした動きが小規模ながらも活性化しているようだ。そうした実践の先駆者的存在が **ジルベール・シモンドン(Gilbert Simondon)** である。89年に他界したこの著者には、主著として3冊の書物があるが、ここではそのうちフランスで最も取り上げられる機会の多い最初の著作『**技術対象の存在様態について**』("Du mode d'existence des **objets techniques**", Aubier, 1989) の簡単な内容紹介を行おう。なお同著書は初版は1958年である。

技術は進化する

シモンドンの議論の要となるのは、一言で言えば、技術が人間を疎外するという従

来の(当時の)議論に、哲学からの解釈によって応えようとするものである。そのためには、技術というものがいかなるものであるか、人間と技術とはどういう関係にあるのか(あるべきなのか)、その関係を見るべき哲学はどのような視座に立つべきなのか、ということが問題となる。同書はこうした問題それぞれに興味深い光を投げかける。

まず技術とは一体何であるか、なぜ人間の疎外がもたらされるのか、が取り上げられる。シモンドンによれば、技術はそれ自体として系列(serie)を形づくっている。それは静的なものではなく、絶えず進化しているのだ。技術の進化を語る上で鍵となるのは「**具体化**」(concretisation)という概念だ。ある意図のもとに既存の技術を用いて実現された機械があるとす。それはいわば寄せ集めであって、部分が相互に分離でき、まだ一体化されていない。「機能が抽象思考によって思惟された(組み合わせられた)」という意味で仮にそれを「**抽象的機械**」と呼ぶ。だがそれは改良を加えられ、相互に切り離せない形で一体化していく。改良には様々な可能性(工夫の)が考えられるが、改良が進むにつれ、可能性の幅は小さくなっていく。こうして分離できない機械、効率の観点からすればより優れた機械ができ上がっていく。これは「**具体的機械**」と呼ぶことができる。そしてその過程は「**具体化**」(concretisation)と呼ぶことができる、というわけだ。ここで個別の部分に眼をやると、当初はちぐはぐだった部分が、やがて系列の中で相互に共生できるようになる。それ一つで個体をなすようになるのだ。つまりそれは個体化するプロセス(processus d'individuation)でもある。シモンドンはこのことを、内燃機関(蒸気機関からルノー・エンジンを経てディーゼルに至る)と電極管の発展の分析から示している。このような機械学(mecanologie)の観点からすると、個々の機械を検討するだけでは進化の過程は見えてこない。その機械が個体化するプロセスをこそ見据えなくてはならないのだ。具体化を通じて、技術対象はより個体性が増し、より多機能なものになっていくのだ。

人間の占める場所

個体(individu)はシステムの全体(ensemble)と部品などの要素(element)の中間に位置する。全体は閉じた体系であり、一方の要素はあくまで要素にすぎず、ともにそれらが置かれた環境に関与しない(外部をもたないということ)。だが個体は、要素と全体とを繋ぐという点で外部に開かれているのだ。さて、近代の産業革命以降、人間が機械による疎外状態に置かれたのは、技術によって実現された(されうる)個体が、それまで人間が占めていた位置(要素と全体を繋ぐ)に取って代わったからなのだ。人間は全体(例えば工場経営者)もしくは要素(労働者)の地位に押しやられてしまったのだ。とくに後者の場合、人間は外部に対して閉ざされた存在のようになり、これが疎外と映ったのである。

では人間はどのような位置を占めればよいのか。ここでシモンドンの議論は、当時

大いに期待されていたサイバネティクスに多くを負うようになる。技術対象には二つの側面がある。つまり身体を延長するものとしての道具(outil)と、より精度の高い知覚を得るための測量器具(instrument)である。技術対象が個体化していくについて、それは道具としての目的性を失い、測量器具の面を取り込んで機能の内的な整合性を図るようになる(自己制御を備えていく)。だがそれはあくまで不完全であり、結局は制御する人間が必要とされるのだ。人間はここで、技術者として必要になるというわけだ。「機械がもつ形式を情報に変える役割を担う」のである。

哲学の位相

人間が技術について思考するという場合の思考(哲学的な)とは何だろうか。この問題にシモンドンは、壮大とも言える見取図を用意している。かつて人間は世界に対して魔術的な一体性(網としての)を有していた。これが前景、後景にわかれ、前者から技術、後者からは宗教が生まれる。宗教はさらに理論と実践(後景と前景)にわかれ、前者からは神学がもたらされ、後者からは儀礼がもたらされる。技術の方からも実践としての職人技巧、理論としての科学がもたらされる。だが一体性を求める視点は常に存続し、儀礼と技巧を統合するものとして美学が発達する。だがそれは不完全な統合しかもたらさない。さらに時代が進めば、技巧と科学の部分統合としての技術、神学と儀礼の部分統合としての政治・社会学がもたらされ、それらを最終的に統合するものとして哲学がもたらされる。その哲学は、ベルグソンの直観において遠い魔術的一体性に呼応するものとされる。

そしてわれわれは…

以上、きわめて概略的な紹介だが、現代に暮らすわれわれにとっては問題点も多い。まず、疎外という問題を考える場合、いまや機械との関係という枠だけでは語れない状況がある。サイバネティクス的な情報を翻訳する者として機械に関われば済む、というわけにはいかないだろう。シモンドンのように機械を熟知した技術者として関われば疎外が生まれず、とは言えない。問題はより複合的で、その度合いは高まる一方だ。さらに、今や技術そのものが多様化し、生物そのものの工学にすら踏み込んでいることから、機械学的な体系論だけで技術対象を語り切ることもできないだろう。遺伝子工学や医療技術などで問われる倫理の問題は、体系とどのようにつながっていくのか。また、哲学を含む人間対世界の巨視的な図式も、生成的と銘打ってはいても、やはり静的なツリー構造でしかないように見える。だが、こうした様々な問題とは別に、人間中心の視点をずらし体系として機械を捉えようとした点には功績を見出すこともできるだろう(スティグラーが言うように、やはり最後には、たとえ疎外の問題を扱うからにせよ、人間が中心に据えられてはいるのだが)。モノの流れと人間とのダイナミズムを考えるために、一度中心をずらす必要があるということ、シモンドンは見抜いていたのだ。ではわたしたちは、そこからどんな教訓を引き出せばよいのだろうか。

(注記)

今のところ、シモンドンの他の著作は未見なのだが、「現代思想」誌96年7月号(特集：機械の身体)には、廣瀬浩司「生成する機械の身体 - シモンドンの機械論とその技術論的転回」という興味深い論考がある。参考にされたい。

(Text: 98年5月)

6. 技術を見る眼 - ルロワ=グーランの場合

アンドレ・ルロワ=グーラン(Andre Leroi-Gourhan、1911 - 1986)は、人類博物館(Musee de l'Homme)の副館長を務めた後、リヨンとパリの大学で教鞭をとった後、68年以降はコレージュ・ド・フランスの教授となった。先史学、民族学の分野ですぐれた業績を残し、著作にはアイヌ民族を扱ったものもある("Un voyage chez Ainous", avec Arlette Leroi-Gourhan, Albin Michel, 1989. 邦訳は『アイヌへの旅』山中一朗訳、大阪文化研究会)。ここでは、技術の民族誌を扱った代表的著作『進化と人間』("Evolution et Techniques", tome I.'L'Homme et la matiere', Albin Michel, 1943 et 1971, tome II, 'Milieu et techniques', Albin Michel, 1945 et 1971.), と、より総合的な文化誌を目指した主著『身ぶりと言葉』("Le geste et la parole", tome I, 'Technique et langage', Albin Michel, 1964, tome II, 'La Memoire et les rythmes', Albin Michel, 1965. 邦訳は荒木亨訳、新潮社)をもとに、その思想的なエッセンスを取り出してみよう。

連続性

ルロワ=グーランの基本的姿勢は、あらゆる事象をその連続性のうちに捉えようとする点にあるといえるだろう。『身ぶりと言葉』(以下GPと略す)の前半では、二足歩行によって手が解放されるプロセスと、顔が小さくなっていくプロセス、そして脳の発達が行って進むことを、進化の流れから説き起こし、考古学的資料にもとづいて詳細に描いてみせる。そこには興味深い指摘がいくつも見られる。技術との関係でいえば、人間という種を特徴づけるものとして、脳の進化が先にあって技術は後から生じたものであるといった通念に批判を加え(GP, tome I, p.42)、むしろ二足歩行とそれによる手の解放、顔の解放こそが重要であり、脳の発達はそれらとの相互関係にあって重要性としてはむしろ二次的であると述べている。手と脳、技術と言語とは、相互に関係し合いともに発達していくのだ。通念的に対立関係に置かれている生物学的な進化と文化的な進歩とは、こうして巨視的な連続性のもとに置き直される。もちろん両者に質的な違いを見出すのはたやすい。だが、そうした差異をむしろメタレベルから捉える時、そこには一貫した流れがあるということが示

されているのだ。西欧的な知の体系がともすれば断絶を見ようとするところにむしろ連続性を見る。そうした批判的なまなざしがルロワ=グーランの著作の全体を貫いている。

外在化

だが、進化というものが変容である以上、人間という種にはそれに固有の特徴がなければならない。それを表すキーワードは外在化(exteriorisation)だ。動物一般は種という単位を中心とし、その記憶は「本能という装置」に立脚するが、対する人間は、言語という装置をもとづく民族という集団を単位としている(GP, tome II, p.11)。種が本能として内的に抱え込んでいるものを、人間は言語をもつことによって民族という形で外部へと転じた、ということである。この作用(あるいは操作)が外在化だ。そこには、純粹に技術的な産物すらをも生物学的な視点から考察できる可能性が開かれている。例えば手と道具の関係を見てみよう。霊長類の場合、手と道具は作用として混合している。ヒト類にいたると、手は直接的な動きを与える源になり(石で打つなど)、新石器時代ごろには間接的な動きを与えるものとなる(石器に柄が付けられる)。その後、動きそのものも外在化されて、手は動きを発動するだけになり(歴史の時代)、自動機械の時代にいたっては、プログラムされたプロセスを発動する役割を担うにすぎなくなっている(GP, tome II, pp.41-42)。このように、手が担っていた役割は徐々に道具へと推移していくのだ。そして今や、人間にいたる進化の流れの中で、ありとあらゆるものが外在化されている。記憶もまたしかり。記憶の外在化の容器として民族集団がある(GP, tome II, p.64)。民族が有する文字や諸形式は外在化された記憶にほかならないのだ。

内部環境、外部環境

一方、『進化と技術』(ここでは71年、73年の増補版を使用している。以下ETと略す)では、人間集団の問題は技術の関係でさらに詳細に論じられている。人間の集団は生物の器官と同様に動く、とされる。つまり、集団はみずからがもつ技術的な対象物を介して、外界とのやりとりを行っているということである(ET, tome II, p.332)。ここで内部環境、外部環境という区別が導入される。外部環境とは、自然や風土、気候などといった外部を指す。それに対して、集団(民族)が固有にもっている状況を内部環境と称している。そしてこれら二つの相互作用から「傾向」が生まれるのである。それは技術的对象物への物象化を通じてしかうかがい知ることのできないものだが、その物象化を通じてなにがしかの将来的な予測を可能にするものでもある(ET, tome II, pp.336-337)。この「傾向」を有する外部環境は連続的であり(一つの技術は、同一集団内の他の技術への応用される)、ある問題に対する民族集団独自のソリューションをもたらす。外部環境はそれ自体変化することはなく、そのため、例えば利用できる物質(鉱物、木々の存在など)が限られているなどといった決定要因により、人類に共通する不可避のソリューションをもたらす。だ

が内部環境は絶えず変化していく。その変化の要因として、ルロワ=グーランは「借用」と「発明」を取り上げる。

「借用」(emprunt)とは近隣の集団からの技術の取り込みのことだ。集団間の技術的レベルが同等で、また不活性状態にない(あるいは技術的に満たされた状態でない)場合、民族間を技術が伝播する(ET, tome II, p.375)。だが借用とはよそからもたらされた技術をただ用いるということではない。借用は内部環境への同化にほかならず、取り込まれた技術は、それを取り込む集団によって変容するのであり、また、取り込んだ集団そのものも、取り込まれた技術によって変容する。これは技術の受容の問題そのものである。技術的進歩には意志(intention)が前提となり、それは外部環境との接点となる技術的対象物に現れる。集団的なそうした意志と物象化を結ぶ心的作用は「連合」(association)であり(ET, tome II, p.397)、民族ごとにそれは異なる。その受容のあり様は当然ながら、それぞれの技術について詳細に追っていく必要があるだろうと思われる。もう一つの「発明」(invention)は、民族集団独自の工夫による革新である。だが、発明は特定個人の才能によって無から生ずるのではない、とルロワ=グーランは言う。発明には、それに先立って利用できる諸技術が存在していなければならず、多くの場合、それは借用されたものであったりもするのだ。発明とは、内部環境における、物象化の点だ(ET, tome II, p.377)。つまり、借用が育む内部環境によって、任意の一点が突出する。その突出点こそが発明なのである。借用と発明は対立するのではなく、連続しているのである。

技術 VS 民族？

民族は技術を取り込んでいくが、それは均一化するためではない。借用は均一化を産むのではなく、それ以前に存在していた要素を補完し変形するのだ(ET, tome II, p.415)。民族は取り込んだ技術に新たな傾向を付与し、その技術によって民族もまた個別化していく(ET, tome II, p.409)。これは、同種の事象があるからといって、それらに共通の祖先があることを想定する視座への鋭い批判となっている。『身ぶりと言葉』の方では、人間は巨大民族(mega-ethnie)に向かっているとし、動物学的な流れ(社会というミクロコスモスに結びついている人間)が解放される、いいかえればさらなる外在化がたどる道とはいかなるものかとの問いを投げかけている。個別化と巨大民族への志向。両者の間にある溝はどう捉えればよいのだろうか。ここで注目すべきは、「群」(masse)に関する議論だろう。アジア太平洋地域における「有色人種」(こうしたやや侮蔑的な表現について、73年の版でルロワ=グーランは注記においてことわり書きを載せている。初版が45年であったことを考えると、これはいたしかたないことだ)間に見られる技術的活動の一覧から、まずは中国-インドネシアの広い範囲で技術が不完全に区分されている状況があり、やがて中国が政治的に突出すると「黄色人種」の「群」を中心とする文化的「収斂」がもたらされ、やがてそれが各国(各地域)の個別化を部分的に方向づけている様子が伺える、

としている(ET, tome II, p.415)。これは民族学、あるいは歴史学が扱う観念の不安定性への批判なのだが(「未開」民族が太古の慣習をそのまま維持しているなどといった観念)、いずれにしても、「群」の形成が政治的なものに関与し、そして個別化が群の形成によって規定されるということなのである。

『身ぶりと言葉』で示された巨大民族が政治的なものであり(アメリカの覇権)、したがって将来的に変化しうるとするならば、そこにもまた、民族的な個別化の契機があることになるのではないだろうか。ネットワークが地上を覆う時代に個別の民族意識が過剰に高まることをドゥブレーは「ジョギング効果」と呼んでいる。それはメンタルな相補作用なのかもしれない。だがことさらに文化と技術とを対立項に仕立てるわけにもいかないだろう。というのも、技術的傾向が内部環境の物象化(表出)であるならば、文化全般もまたそうだろうからだ。民族集団における借用が進むにつれて、技術に対する浸透性は高まる(ET, tome II, p.343)ならば、文化は新たな借用を必要としない、いわば満たされた技術性だともいえるのではないか。これは確かに再考を要するだろう。しかしルロワ=グーランによって開かれた視座は、技術と文化とを「連続性」において捉える可能性をも指し示しているのではないだろうか。

(Text: 98年12月)

8. セルゲイ・チャコチンのプロパガンダ論について

セルゲイ・チャコチン(またはチャホチン: Serge Tchakhotine, 1883-1973)はパブロフの助手を経て、その後政界入りし、反ナチ運動を展開?たという一風変わった経歴をもつ。その代表的著作『政治プロパガンダによる群衆の凌辱』("Le Viol des foules par la propagande politique", Gallimard, 1952)は、1939年にフランス外務省による検閲に引っかかり、40年にはドイツで発禁処分となり、52年によろやく改定版が日の目を見た。条件反射をベースにした社会心理学の古典であり、あまりにも素朴と言わざるを得ない進歩史観や、心理学上の知見が古くなってしまっていること、あるいはメディアオロジー的に言えば「媒体」の考察が十分ではないなどの批判は可能だが、新興宗教のマインドコントロールや、あるいは最近の社会の右傾化などを見聞きするにつけても、同書で示されるプロパガンダ論は、いまだにアクチャリティを失ってはいないようにも思われる。ガリマールのTel草書版で600ページに及ぶ大著だけに、ディテールを詳しく検証するわけにはいかないが、さしあたり以下にそのエッセンスをまとめておくのは、決して無意味ではないと思われる。

チャコチンの社会心理学のベースはパブロフの条件反射にある。条件反射は生物の基本的な衝動の上に築かれる体系だが、ベースとなるその衝動(本能に代えて、チャ

コチンはpulsionという語をあてている)は4つあるとされる。強度でならべると、それらは、1. 闘争衝動、2. 食欲衝動、3. 性欲衝動、4. 保護衝動の順になる。人間の行動は、これら4つの衝動をベースに、その上に様々な条件反射を複合的に張り巡らせている?Aというのがここでの議論だ。そして他にもまして強く作用するのが戦闘衝動であり、戦闘衝動をもとに、個々人が扱うことのできない部分が?W団、ひいては国家に委託されるのだ。人間の行動学としての社会学や経済学などをも、実証的な心理学に立脚する形で組みかえなくてはなら?ないと論じられる。オーギュスト・コントが模索した、生物学の上に立つ社会学という構想が、再び回帰していると見ることができるだろう。

このような立場から、チャコチンは既存の諸説を批判する。ここでは詳しくは取り上げないが、例えばフロイトへの批判がある。フロイトは無意識の発見に寄与したわけだが、3番目の性衝動のみに力点を置きすぎるとして批判が加えられる。むしろ権力への渴望を原初的とみるアドラ?に共感を寄せるものの、それとて一義的すぎる点は看過できないとされる。マルクスの場合、その階級闘争をめぐる考察において戦闘衝動に?5.しているものの、その際のアプローチにおいて、あくまで経済活動(2番目の衝動に立脚する行動)そのものからのみ考察しているのは十分ではないという。

チャコチンによれば、歴史的に人間はより大きな自由を獲得するよう進歩しているのだが、時にそれは暴力(政治的凌辱)によって阻害されてしまうという。集団の中の個人の行動は、4つの衝動の上に築かれた様々な条件反射に左右されており、それは時に心理的暴力によって一定方向?よとねじ曲げられてしまうというわけだ。群衆(これはイコール大衆ではなく、より限定された集団を指す)は指導者を必要とし、指導者を模倣?よようとするのだが、指導者側からの心理操作によって容易に自由を奪われてしまう。指導者は意識的、無意識的にかかわらず、心理操作とい?、暴力を突き付けてくるのだ。とすれば、心理操作がどのようなものであるか知ることが重要になってくる。

チャコチンは32年、ドイツで反ナチ運動に参加した。三本の矢のシンボルを使ったその反ナチキャンペーンは、ヘッセン州での選挙で成功をおさめるが、運動の指導者側の姿勢から最終的には敗北するという苦い経験を味わった。このあたりの記述は実に細かいのだが、いずれにしてもチャコチンのプロパガンダ戦略は一応の有効性を示したのだ。それはナチス側のキャンペーンの裏をたくみに突いたものだった。チャコチンによれば、プロパガンダを組織する際には二重のアプローチが必要となる。一般大衆の中で積極的な関心を寄せるのはインテリ層、ブルジョア層を中心とする1割ほどの人口に過ぎない。まずはこれらの層に対して、文書による理性的なキャンペーンが必要となる。同時にこれらの層はアジテータとして組織されなければならない。その組織を通じて残りの9割に対するキャンペーンを展開しなければならず、その際のキャンペーンは、口頭の、わかりやすい(暗示的な)ものでな

なければならない。後者においては、シンボルマークも有用となるほか、公共媒体をも駆使した幅広い展開が必要となる。実際、ナチスが行った政治的な宣伝もこの図式をなぞっている。ナチスの巧妙さは、大衆に訴える際にまず不安を大いに誇示した点にある。一般に、不安・恐怖は人々を一種の催眠状態に置きやすい。そうした素地を作っておいて、解決策の希望を簡潔に示しつつ、人々の行動規範(義務)を植え付けていくのだ。チャコチンはこのプロセスを「心理的凌辱」と呼ぶ。そしてその心理的凌辱は、第二次大戦後も政治の舞台で綿々と受け継がれているという。

現行の民主主義は「民主主義もどき」(democratoidie)にすぎないのだという。組織の規模が大きくなると代議制が孕むオートマティズムも大きくなり、官僚制の支配のもとで群衆が心理操作を受けるようになってしまう。組織が民意を反映するのではなく、民意が組織によって操られるようになるのだ。これに対してチャコチンが唱える社会変革は次のようなものだ。まずは小集団化が必要である。組織自体は無意識に根ざす闘争行動から成り立っている以上、不可欠ではあるが、オートマティズムを回避するに集団規模は小さくしなければならない。同時に、プロパガンダの心構えを養うために新しい教育が必要だ。それは1対9の大衆の構成比率を変えるための準備でもある。模索されるべきは、強制する教育ではなく、自発的な行動を促す教育だ。一方で、恐怖ではなく群衆の側からの積極的な政治参加を促すために、恐怖ではなく熱意をベースにしたプロパガンダが展開されなければならない。そしてそこには虚偽(ナチスの場合のように)が混じってはならない。チャコチンの目標は人々の自由の促進であり、そのために実現すべき社会は「小規模の直接参加型民主主義としての社会主義」だ。それは現実の社会主義国家とは違い、体制である。なぜなら現実に存在する社会主義・共産主義国家は、厳密には「首長国家」(Etat directorial)でしかなく、真の理想への過渡形態にすぎないからだ。

こうした議論からわれわれは何を汲み取るべきだろうか。チャコチンのやや性急な進歩観はとりあえず置いておこう。目標、理想などの是非については、それはマイナーリペアに過ぎないことは明らかだ。そこでいう「真の社会主義」の是非もとりあえずは置いておこう。しかし、民意を反映した民主主義の可能性は、改めて検討されてしかるべきかもしれない。ラディカルな改革が実を結ばないことを知っているわれわれにとって、マイナーリペアが新たなオルタナティブを探る道であることも確かだろうからだ。

プロパガンダが対象別に二重のプロセス(1割と9割)を経るなどの指摘は興味深い。また、小規模集団の必要性や教育の改革についての提言も、昨今の市民団体の活動などにとって大きなヒントになりうるかもしれない。同時に、政治的な煽動のからくりを理解し、それに抵抗するために教育改革が必要だという点も、閉ざしはならない議論だろう。不安・恐怖がプロパガンダを受け入れやすくするのであれば、それに代る楽観、あるいは楽観を許すような土壌、さらには楽観をもたらすような行動的主体が育まれるよう、努力がなされるべきだろう。現状の世界を見

るに、そうした視座の重要性はいっそう高まってきているようにも思われる。

こうした政治的な考察とは別に、同書からはまだ多くの示唆が得られるだろう。一つは生物学に根ざした社会学という可能性だ。もちろん条件反射をベースにしたプロパガンダ論は、メディアオロジー的に言って、あまりに単純な図式ではある。人間の闘争衝動が組織のベースになっているにしても、組織化の力学ははるかに複雑な経緯をたどるはずであり、その経緯こそが問題にされなければならないのだし、群衆が指導者を模倣しようとするのが思想の伝播をもたらすという議論も、組織論としては何も言っていないに等しいだろう。もっとも、チャコチン自身、レーニンなどの例を引きつつ、群衆に奉仕するはずの指導者が組織の頂点に押し上げられていくことを指摘してもいるのだが、いずれにしても、ベースと到達点だけではなく、その中間部分、推移の部分に光をあてる必要があるだろう。その際のベースに現代の生物学を据えうるのかどうかの検討も含めて、ここには長い探求の道が開かれている。

(Text: 99年6月)

8. デリダ - スティグレールによる技術をめぐる対話

『テレビのエコグラフィー』("Echographies de la television", Galilee - INA, 1996)は、ジャック・デリダとベルナルド・スティグレールによる技術をめぐる哲学的対話だ。最初に『パサージュ』誌に掲載されたデリダのインタビューの一部が再録され、続いて両者の対話(デリダへのインタビュー)、最後にスティグレールによる画像論が収録されている。ここでは主軸になる議論のいくつかのみを羅列的に記しておこう。

人為的時事性

最初のインタビューの抜粋で、デリダは人造物(artefacte)と時事性(actualite)を合わせたartefactualite(人為的時事性)との造語を示している。ニュースの配信が送信側のフィルタを経ていること(生中継の欺瞞性、民族中心的な報道)に常に批判的でなければならないとして、この概念が提出されている。出来事(eventement)には還元不可能な部分があり、それを捉えることが哲学の役割となるのだという。非時間的なものが時間の中に現れる(p.17)のが出来事であり、その現れ(現前の切迫)は差延の思考によってこそ捉えられる。出来事の予測は、救い(=裁き)のメシア的空間(=司法的空間)をもたらすが、出来事の切迫を思惟することは、法(=権利)の空間をもたらす。かくして、哲学の役割はetre(存在)ではなくvenir(到来)について考えることにある。到来とは、規定されていないもの、すなわち他者の到来だ(pp.19-20)。根源的な悪は回帰する。哲学はそうした根源的な悪を亡霊として排除してき

た。精神はそうした亡霊のどれかを選択している。だがその回帰は可能性として常に存在する(p.30)。回帰するものはその都度新たな出来事として回帰する。このことをわれわれは自覚していなければならない。差延はここで、回帰そのものを問い直すための概念装置として再び提示される。

遠隔技術

スティグレルとのインタビューにおけるデリダは、様々な問題を論じながら、どこか西欧の左翼系知識人という凡庸さをあえて身に纏いつつ、そのこと自体を問題として示そうとしているかのようにも映る。あるいはそれは、自分の言動、行動が自分の意に反して使われることを警戒している(p.46)からだろうか。テレビなどの遠隔技術(teletechnologie)への批判としてデリダが述べるのは、まず技術の背後にある権力に、制御と監視とを委ねるわけにはいかない、そのために戦うべきだ、というものだ(pp.41-42)。生中継は文字と同じく「死せるものの生きた現前」であり、そこでは生そのものと生存することとが分離されている(p.61)。だがそうした現前が選択やフレーミングなどの結果でしかないことを忘れてはならないとデリダはいう。さらに、視聴率などの市場原理によって、公共空間の公共性が制限されてはならないとしている(p.54)。

フランスが打ち出した「文化例外」についてスティグレルは、それが導く保護主義を、「差延」の概念で覇権主義への代案とできないかと問う。デリダの回答はこうだ。戦いの前線はフランスにのみ限ってはならない、アメリカでも映画の独立系の製作は保護すべきであり、それも含めて、市場に支配されずに公共空間を解放することは民主主義の問題だ、技術全般について法的に規制することよりは、その利用についての教育の方が重要だ、記憶の政治的な取り込みは批判されるべきだが、その政治批判すら批判されるべきだ…。民主的な監視の姿勢を育むべく教育に力点を置くこと、それが本書の通底音をなしている。やや皮相的で凡庸とも受け取れるこうした姿勢と、デリダの論じる主要テーマがどう関わるのかは興味深い点だ。大まかにいえば、凡庸な議論を根源的な問いかけを経て二重化する試みのようにも思える。

継承の問題

ある種の創造行為を締め出すことがないよう、文化例外を用いるべきだ(p.99)、というデリダは、流動的な構造体としての国家についてはこれを支持すると述べている(pp.86-87)。だが現実の国家が各国民に結びついている点には再考が必要だとし、「いま、ここ」を不安定にする技術の発展が個々の国民国家を揺るがせつつある今、技術の発展を止めずに個別性の別の経験をもたらす(p.92)道を探ることを提唱している。技術は継承を打ち砕くが、一方で技術がなければ継承もありえない(p.100)。継承が個別化に結びついている以上、前者の視点からは技術を締め出す視

点が出てくるが、逆に後者の視点からは継承することの責任が投入される。

継承は記録媒体と結びついている。だが例えばアメリカのロドニー・キングの証言に見られるように(暴力現場を撮影したビデオが法廷に提出されたが、結局撮影者本人が証言することとなった)、技術による痕跡と証言の間には相反性がある、とデリダはいう。記録媒体よりも言説の方が信用される。しかし実は証言は常に技術に支えられている。記録媒体は言説、つまり反省的思考を支え、それ自体は反省的思考の対象とはならない布置関係にある。これを受けてスティグレールは、証言が反省的思考であるのは「かくありき(Ca-a-ete)」の記録形態として文字に支えられているからではないか(文字もまた技術だ)と問う。デリダは、反省的思考と非反省的思考があるのではなく、反省にも二つの系が存在するのだと述べる(p.116)。科学における正確さはアルファベット(表音文字)に依存するものではなく、むしろ非アルファベットの形式化の側に存する。そもそも保存記録(archive)とは死の先取りであり、到来するものをあらかじめ反復的に制御するがゆえに、それは未来を閉じる同時に開くことを意味する。デリダによれば、保存記録をなすということは、あらかじめ喪に服し、死を償却できることなのだ(p.119)。反省とはすでに到来したものをみること(=予測すること)だが、保存記録が未来の先取りであること自体が未来そのものの非決定性をもあぶり出す。意味をもたらすと同時に非・意味をも開くのだ。正確さや意味をもたらすもの、理解可能性をもたらすものは、それ自体理解可能ではない(p.121)のであり、したがって技術そのものは理解可能ではないことになる。哲学的視座はこの場合、意味の獲得に向かいつつ、それが未知なるものでありつつけることを認識すること(exappropriation:脱獲得)にほかならない(p.123)。技術へのアプローチは漸近的でしかありえない、対象と、対象を捉える目そのものを同時に内省せよ…対象だけ、あるいはメタレベルだけに留ろうとする安易な認識を戒めるこの忠告は、われわれに大きな知的緊張を強いる。

死の先取りである保存記録は、かくして亡霊を呼び覚ます。亡霊はわれわれを見るが、われわれからは亡霊は見えない。その絶対的視線が法をなすのであり、ゆえにわれわれは継承「しなければならない」。だが一方で、亡霊との関わりはわれわれの自由の条件でもあるのだ(未来は閉じられると同時に開かれる)。われわれは事物(対象)だけでなく、証言する可能性そのもの(対象を捉える目)をも継承する。継承は二重に構造化されているというわけだ。出来事の記録は常に遅延し、その時間化(遅延)はすでに保持(連続性)という形で構造化されている。その両者を支えるところに技術が規定されるという布置になるだろう。だが一方で継承は集団と密接に関わっている(ダブル)。メディアロジー的な集団組織論と亡霊のテーマ系としての継承論とをどう繋げることができるのか、改めて考えていく必要があるだろう。

スティグレールによる画像論

巻末に収録されたスティグレールの画像論にも簡単に触れておこう。デジタル画像

は離散的画像だ。それは新しい形の客観的分析、見えるものの主観的統合をもたらす(p.170)とスティグレルという。ボードレールの写真は、見る者としての「私」に触れるが、「私」の側はボードレールには触れられない。だがデジタル画像は、そうした「亡霊の効果」を曖昧なものにする(p.172)。アナログ写真は現実的な効果(「かくありき」)をもたらすが、実はそれもまた、画素やフレーミング、撮影のコンテキストなどによって織りなされており、すでにして離散的だった。亡霊はそれら要素の統合によってもたらされる。意識にとりついている亡霊、妄想を、画像が再活性化するのだ。だがデジタル時代の映像は、そこに様々な人為的效果(合成)が介入していることから、見る側の分析的な姿勢を要求する。すると「かくありき」への信奉も解体されていくのではないか。これがスティグレルの議論だ。話言葉が文字として書かれるためには、話言葉はすでに文字でなければならない(p.182)、生命はすでに「映画」でなければならない、という。あるいは補綴は、そうした内在的な離散性を明るみに出しつつ、亡霊としての連続性の統合(二次的な)をもたらすものなのかもしれない。しかしたとえそうでも、その分析性、統合性は、アナログ画像と文字との間に見られるように、技術の下位区分において当然隔たってくるだろう。デジタル画像はそれほど大きな分析的姿勢を喚起するのだろうか。「かくありき」という現実的な効果が解体される以上に、亡霊という統合の効果の誘惑は大きいのではないか。この点も今後別稿で再び考えてみたい。

(Text: 99年4月)

9. フランソワ・ダゴニエの「マティエール論」

フランソワ・ダゴニエ(Francois Dagognet)については、すでに著作の邦訳も5冊を数え、ここで改めて紹介する必要はないかもしれない。24年生まれ、リヨンのジャン・ムーラン大学の教授を務めたのち、パリ第1大学哲学教授となったダゴニエは、その医学の知識を背景に、科学技術論にまつわる多数の著作を発表している。メディアロジーもまた科学技術論、フランス認識論の流れを多少なりとも汲んでいる以上、ダゴニエの影響を見逃すわけにはいかないだろう。ここではダブルが『伝達作用』の中で文献として挙げている『再物質化(Rematerialiser)』("Rematerialiser", Paris, J.Vrin, 1989)(ダゴニエの邦訳を数多く手掛けている金森修氏の紹介では『ネオ唯物論』のタイトルで言及されている)を概観し、簡単にその示唆を汲み取っておこう。

ダゴニエはまず、ヘーゲル以降、近代の一つの指標として感覚的なもののシステムティックな排除されていったことを指摘する。かくして美学からは素材に向かうまなざしが消え、教育においてはレジュメが奨励されてテキストの枝葉がそがれ、異質なものの接合によって育まれていたはずの科学も、パターン化の脅威にさらされ

ていく。経済においても、金に代り紙幣が用いられるようになり「価値」が浮遊していく。

だが、近代のこうした動きの批判者だったバシュラールにならい、ダゴニエは物質が実は様々な側面で「近代」を支えてきたこと、そしてその重要性が現代においていっそう高まっていることを開示してみせる。まずは芸術における素材の回帰だ。**ヴァザルリ** (Victor VASARELY, 1908-1997 : ハンガリー出身の構成主義作家)のオプティカル・アート、**デュビュフェ** (Jean DUBUFFET, 1901-1985 : フランスの画家、彫刻家)、そして**ヴィアラ** (Claude VIALLAT)における〈網目〉の作品など、今添付ラリー・アートに見られる素材指向の動きを追っていく。詩やアートは時に、見逃されている根源の動き、あるいはその表出の先取りを開示することがある。特にヴィアラの「織物」への指向から、ダゴニエは次に繊維工業の歴史へと筆を進めていく。

そもそも繊維には、出来上がった布としての感覚的なものと、織るという行為の知的なものとは結び付いている。繊維は、天然素材の改良(1710年ごろの**レオミュール** (Reaumur)による研究)から、合成繊維の開発(1884年、**シャルドネ** (Chardonnet)による人工繊維)へと移行していく。それはいわば大地との関係を絶っていく過程だ。そして新たに出現した素材は、社会関係や産業、文化の変化をも導いていく。ダゴニエはここで刺激的な仮説を提示する。すなわち、繊維業こそが科学の母体になったのではないかという仮説だ。天然素材の改良は生体化学の発展を導き、結合的分析は情報科学の基礎となり、織りなす柄の探求は絵画などにも影響を与えた(例えばフランドル絵画はインド更紗などの染織との差別化を図るべく導かれた)というのだ。さらに織布の機械化、自動化は映画の素地としてのパーフォレーションをも導いているという。物質のもたらすインパクトは図り知れないというのだ。

ダゴニエはさらに鉄鋼や接着剤を例に挙げる。鉄はそもそも化学組成としては不安定な状態でしか存在しえない。それゆえ絶えざる改良がなされている。一般に鉄と称されているものは、実に様々なバリエーションに彩られているのだ。また接着剤は、分子レベルでの化学組成の変化をもたらすものとなっており、そこからは「集合体」の概念が刷新されうるのだという。このように、従来、哲学の考察対象から排除されてきた素材・物質から、新しい認識論が生まれうることをダゴニエは指摘し、様々なディテールを挙げて物質における豊かさを讃えている。

本書もそうだが、ダゴニエには、技術の進歩を肯定的に捉えようとする姿勢が顕著に現れている。やや楽観に走りすぎるきらいもないとは言えないのだが、同時にそれが突き付ける技術論そのものの見直しの可能性も、軽視するわけにはいかないだろう。われわれが共通認識とすべき議論の一つに、技術が身体の外在化であるというテーゼがあるわけだが、このテーゼそのものも詳細な検討が必要ではないかとい

うことを教えてくれるのだ。繊維において自然への働きかけから自律した人工物への移行が示されているが、その間には実に豊かなディテールがある。それらは必ずしも一方向に向かってはおらず、むしろ混沌とした状況があるように見えるのだ。それを「外在化」という単一概念で括ってしまうのは、後から振り返った限りでの直線的な進歩史観にすぎないということになるのではないか、という疑問も立ち現れてしまう。要は「外在化」のプロセスを詳細に見ていかなければならないということであり、その脱構築的な視座が必要だということだ。それを経なければ、技術論は硬直し、種々の決定論(狭義の)に捉えられ身動きできなくなってしまうように思われる。われわれは一度ミクロ分析へと降りていなければならぬだろう。

(Text: 99年6月)

10. ジラルールの後継者たち - ミメーシス理論の応用へ

ルネ・ジラルール(Rene Girard)が唱えた欲望の三角形(ミメーシス理論)は、センセーショナルな議論として登場し、様々な批判に晒されてきたようだが、組織あるいは社会関係を検証する際の手がかりとしては決して全て無効ではないように思われる。ここでは、文学研究から出発したその理論に触発され、経済の論理の検証に適用を試みた二人の著者の論文が収録された一冊を簡単にまとめ、その有用の可能性の一端を覗いてみることにしよう。取り上げる書籍は『モノという地獄』("L'enfer des choses", Seuil, 1979)だ。二人の著者とはジャン=ピエール・デュピュイ(Jean-Pierre Dupuy)とポール・デュムシェル(Paul Dumochel)。同書の刊行当時、前者は理学第学校(ポリテクニク)とCNRS(国立科学研究センター)の講師、後者はケベックで教鞭を取っていた。

まずは簡単にミメーシス理論について復習しておこう。マルクスの価値論のように、これ自体はあくまで観念的な理論だ(これ自体もメディアロジー的観点から批判可能なのだろうが、それはひとまず置いておく)。人が何らかの対象物を欲するのはなぜか。ジラルールの答えはこうだ。つまりそれは主体が欲望する他者がその対象物を欲するからである。対象への欲望というのはそれ自体では存在しない。欲望は必ず他者に向けられるのであり、この主体 - 他者の関係を対象物が媒介する。他者への欲望、つまり人と人の諸関係の根源は、対象への欲望に先行する(他者への欲望とは、差異が落差として認識されることから生ずる)。こうして、主体 - 対象(物) - 他者という三角形が成立する。主体は他者を模倣しようとする。他者とはモデル(手本、模範)なのだ。模倣するための手段として対象を得ようとするのだが、この欲望は暴力と表裏一体だ。なぜならモデルへと近づくにつれて(差異が薄れていくにつれて)、欲望は憎悪に転ずるからだ。モデルが手にしている対象物を自分も手に入れるには、モデルそのものが邪魔になってくる。かくして個人同士の間では、こうした「他者への欲望」が相互に渦巻き、個人はともに絶えざる緊張関係に置かれる。だ

がこれでは社会関係はもたない。こうした欲望をうまく逸すために、社会に用意されている装置、それが供犠にほかならない。相互に憎悪を向け合う状況を回避するには、憎悪を一身に背負う犠牲者があればよい。これが集団による供犠の正体であり、相互の暴力関係を調整するために、浄化としての暴力が行使されるのだ。こうして主体は一時的に落差を清算し、差異の体系を秩序づけ、集団は無秩序から救われ安定する。

羨望の論理

この理論から、デュピュイはまず、経済学が想定する「対象を欲する主体」が幻想にすぎないことを指摘する。主体がモノを欲するのは、まずもって主体が他者への羨望(envie)を抱くからだ。他者からの承認欲望(見られたいという思い)が先にあるのではなく、むしろ他者への羨望(他者へのまなざし)が先行する(p.37)。この羨望から主体の相互暴力の関係が生まれてくるのだが、前近代社会の場合、階級社会という制度によって差異の解消を防ぎ、羨望そのものの備給を断ち切ることができた。だが、近代になって階級社会が解体していくと、羨望は人間間の戦いそのものを招くようになる(p.42)。模倣すべきものとしての他者(モデル)が浮上していくに従って、モデルへ到達する手段としてのモノ(媒体)も主体の中で内面化され、対象物の物質性が薄れ(p.65)(価値だけが残る)、やがてはモデルそのものと一体化し、主体はモデルが体現する尊厳などの社会的価値そのものを求めるようになる。模倣すべきモデルは、主体にとって常に成功をおさめていなくてはならず、逆接的に、障害として立ち塞がるモデルに対し、主体の欲望は常に頓挫する運命にあるのだが、その都度欲望の対象は変わっていく(p.96)。

近代の社会(ジラールの議論はそこで踏みとどまっている)においては、等価、交換価値の論理がミメシスを飼い慣らすためのシステムとして機能している。とはいえミメシスは前近代以上の猛威を振るっているものであり(前近代の階級社会の解体)、それは危機的な状況でもある。それゆえにこそ、新たな媒介が必要になってくるのではないか。そしてそれは非暴力的なものでなければならないだろう。こうしてデュピュイは、フランシスコ・バレーラの言う自己参照系の議論を借用し、「インターフェース」(主体と客体をつなぐもの)としての媒介の可能性に言及する。「他律」と自律の間の「肯定的シナジー」(イリイチ)と称する新たな媒介作用を求めること、それはとりもなおさず、立ち塞がる障害をインターフェースとして実現すること(p.114)に他ならない。これはつまり、欲望の作用そのものの認識イコール欲望の戦略の頓挫、というパラドクスを組み換えようということだ。欲望の作用に身をまかせつつも、同時に欲望の戦略の認識へと絶えず身を引くこと、内部と外部に同時に留まること。モデルとしての他者を、自己にとってのインターフェースの中へと霧散させることによって、それを同時に生きまた認識しようという戦略なのだろう。おそらくこれは簡単なことではない。

一方で、それ以上に今求められているのは、近代経済がもたらした貧富の拡大などの諸問題についての対応だろう。その文脈においてこそ、近代経済そのものへの根源的な批判が加えられてしかるべきだろう。そのためには視点を変えてみなくてはならない。もう一人のデュムシエルの議論がそうした問題系へと導いてくれる。

希少性の論理

デュムシエルによれば、近代経済学、とくに伝統的なリベラリズムの理論の要になっているのは、「希少性」という概念だ。希少性は限られた財ということであり、戦争などの暴力行為の原因になっているほか、経済活動そのものの原動力でもある(貧困から脱出するためには、少ない財を獲得できるよう努めよ、というわけだ)。このように希少性は両義的なものとして捉えられる(p.141)。リベラリズムはそこに量的な区分を設け、極端な希少性は悪だが、相対的な希少性は有益だ、という論を展開する。

だが、実は希少性なるものは近代における構築物にすぎない、と著者は論じる。民族学からの所見をベースに、原始社会には希少性とは無縁であったに違いないというのだ。そうした社会では、構成員間の連帯が基本となっており、互いに補い合うがゆえにそもそも財が希少であるなどとは考えられない、誰も困りはしないのだ。希少性が出現するとすれば、とりもなおさずそれは共同体に解体の危機が訪れる時なのだ(飢饉など)。

構成員の連帯は義務に基づいている。ここにこそミメシス理論が生きてくる。相互のミメシスがもたらす混乱を回避するための供犠が儀礼化することによって、構成員相互の暴力関係は鎮まり、そこに連帯の義務感が植え付けられる。だが、この浄化のプロセスは反復されなくてはならない。そして共同体の危機的状況(希少性の浮上)に際しては連帯そのものが新たな対立・暴力を育むのであり、構成員にとっての外部性が浮上してくると、連帯は無力化する。対立関係そのものが外在化するように仕向けることが供犠の戦略なのだが、対立が激化するとそれすら機能しなくなる。構成員にとって外在化が目に見えなくなると、結果的に激化した対立そのものすら隠蔽されてしまう。内面化された対立関係の対象は、常に上位の者(階級的に、あるいは財力的に)となるのだが、結果的にそれ以外の(下位の)第三者は考慮の対象から外される。かつては連帯の義務によって配慮の対象だったそれらの第三者は、こうして無視されてしまい、貧困のままに放置される。希少性にもとづく経済の論理には、貧困は構造的に内在しているのだ。

これはまさに英国におけるエンクロージャーに見られた現象だった。小規模地主と下層民が連帯に基づき柔軟な土地管理・農業経営を行っていたところに、ブルジョワ階級の台頭に危機感を抱いた貴族階級が、生産効率を上げ富の増大を図るべく農地の厳密な区画化を行ったために、一部の地主は潤ったものの、共同で柔軟に使い

た土地が消えたこと(土地は希少なるものとなったのだ)から小規模地主はかえって農地管理が困難になり、またそれらに労働力を提供していた遊民ら下層階級も追われ、かくして貧困は質・量ともに拡大するのだ。デュムシエルは貧困問題が希少性の論理に内在することを暴き批判してみせた。とするならば、貧困問題の本質的解決は別の論理に頼らざるを得ないことになる。どのような論理が可能かをデュムシエルは特に示してはいないが、現代においてはその考案こそが急務だといえるだろう。エコロジー問題など、希少性の観念はわれわれの意識においていよいよ高まり、グローバルな水準で社会の解体の危機を招いている(もちろん、そこに「作られた希少性」がまとわりついていない保証はないが)。上のデュピュイが示唆する自己参照的なスタンスへの移行から、そうした答えを引き出せるのかどうかはわからない。仮にそのようなスタンスへの移行が可能であるとしても、それを一般的に実現するためには、どのような技術、制度、概念装置の転換が必要になってくるだろうか。とりあえずは二人の著者が突き付ける挑発は正面から受け止めよう。その中で諸問題への回答が見い出せるかどうかは、これからにかかっているだろう。

(Text: 99年7月)